

音楽教育とハイテク

鈴木 寛 (兵庫教育大学教授)

プロローグ

この度編集部からのご依頼でかねてより私が提唱してきたSML理論による音楽教育とハイテクとの関係について連載をすることになりました。

思い起こせば1990年5月号から92年12月まで「音楽教育とDTM」というタイトルで32回にわたって当誌に連載をさせていただいたのが昨日のことに思い出されます。このDTMと言う和製英語(普通のアメリカ人には通じない)はその頃に本誌が世界で最初に使用したもので、現在では国内では当たり前のように使われていることをご存じの読者もたくさんいらっしゃるでしょう。昨今DTMのシステムがパッケージとして色々なメーカーから販売されています。全国の先進的な小中学校の研究授業においてもコンピュータやシンセサイザーなどのいわゆる「ハイテク機器」が使われています。

最初の頃は簡単な計算しかできなかった電卓でも1万円前後だったのが今や500円前後となり、コンピュータに至っては能力は数百倍で価格は数分の一という時代になってしまいました。インターネットをはじめとするいわゆる「情報化」の嵐が女子高校生の三種の神器の一つであるポケベルや携帯電話の普及をオバタリアンにまで広げてしまいました。

この情報化の波は、量においても質においても一人の個人が対応できる限界を既に超えており、等身大の文化さえ身につけておけば良かった昔と違い、常に「超(チョーとも言う)」を接頭語として用いなければ生きていけない時代になってしまったのです。しかもそれを人より早くという条件付きで。

さて話は変わって、最近ウォーキングがブームと言われています。筆者も毎日の日課として昼食後1時間程度の散歩をしています。いくつかのコースを用意しておいてその日の気分や体力に応じて気の向くままに歩いています。

歩いていて気がつくことは、ちょっとした道ばたやよその家の庭先の草花が季節の変化を教えてくれることです。ドア・トゥ・ドアの毎日では桜が咲いたというニュースですらテレビや新聞に頼ってしまうことが多いのですが、自分の目で確かめられるのは楽しいし新鮮な驚きに満ちています。今何がはやっているというニュースでもマスコミからの情報を受け売りになっているに過ぎないことが多いのです。自分の足で歩いてみて自分の目の高さで速度でものを見ると、それらの情報とは異なる本当の姿が見えてくるのです。ハイテクの世界も自分の目の高さで何を見るか

という選択眼でみればずいぶんとマスコミの情報と違うことに気がつくでしょう。

今、筆者はこの原稿をMacintosh PowerBook1400cを使って書いています。そして、ほんの1日前このマシンのOS8にバージョンを上げたばかりなのですが、何とDisk Doubler(ファイルを自動的に圧縮・解凍することで、ディスク容量を約2倍に見せかけるソフト)の最新バージョンでさえもサポートできないのです。その結果、自動圧縮されたファイル全部が一度手動で解凍しないと使えなくなってしまったのです。何のためのバージョンアップだったのでしょうかと後悔の涙にくれている私です。私の入手できた情報では良いこと尽くめの前宣伝でしたし、OS7.6のユーザーには無償でOS8が送られて来たのですから、インストールするかしないかは本人に任されていたはずですが、OS8はクラリス社が、Disk DoublerはSYMANTEC社がそれぞれ販売しているもので、開発のテンポや目的が必ずしも一致していないのです。ところが、情報化社会の空気に慣れすぎた私がついいうっかりはまったのは4か月前に入手していたDisk Doublerで当時の最新バージョンとしてOS7.5以上に対応ということだったのでしばらくはこれでいけると安心していただけました。

こんなことは、シンセやコンピュータの世界では日常茶飯事かも知れませんが迷惑な話です。さて、これから連載を始めるにあたり長々とくだらないことを書いてと思われるかも知れませんが、何回続くか分かりませんが文字になって残るものに嘘があったり、数カ月で陳腐になってしまふようなことにならないようにするつもりで読者の皆様に正しい情報を提供すると共に、ウォーキングのようなプロセスを大切に連載にしたいと思っていますからです。

新年号から始まるこの連載のタイトル「SML理論」とはもうかれこれ13年程前に私が提唱し始めた理論で、音楽という行為や事象を「S」即ちサウンド(音)のエリアと「M」即ちミュージック(音楽)のエリアに分けて考え、「L」即ちライフ(生活)の中にどう位置づけるかを考えようというもので、Sは「知覚」でMは「認知」でLはEQでお馴染みの「情動」で説明しようとする理論なのです。既に私のホームページ(<http://www.art.hyogo-u.ac.jp/hrsuzuki/jindex.html>)では一部を開陳しておりますし、本誌連載中に出版も予定していますが、本誌ではかみ砕いた形で特にハイテクとの関係に重点を置いて書かせていただく予定です。

それでは良いお年をお迎え下さい。